

南アルプス（白根三山）におけるケージ内保護方法の実施状況について

1. 実施概要

近年のライチョウの減少傾向の要因として、孵化後の雛の生存率は降雨量、気温による影響が大きいことが指摘され、また猛禽類、キツネ、テン、オコジョ、ハシブトガラス等による捕食による影響も考えられている。ライチョウの保全に資する技術検討の一環として、孵化後の雛の減少を食い止めるために、乗鞍岳周辺において孵化直後のライチョウの家族を一定期間ケージ内で保護するケージ内保護方法¹の技術確立を実施し、一定の成果が得られている。

平成 28 年度は、前年度に引き続き個体数の減少が著しい南アルプス地域の北岳において実施し、ライチョウ保護のための小型移動式ケージにいったん収容した後、大型固定ケージへの誘導及びその後のライチョウ家族の保護を実施した。

2. 実施状況

(1) 実施場所

南アルプスの北岳山荘周辺で実施（図 1 参照）。

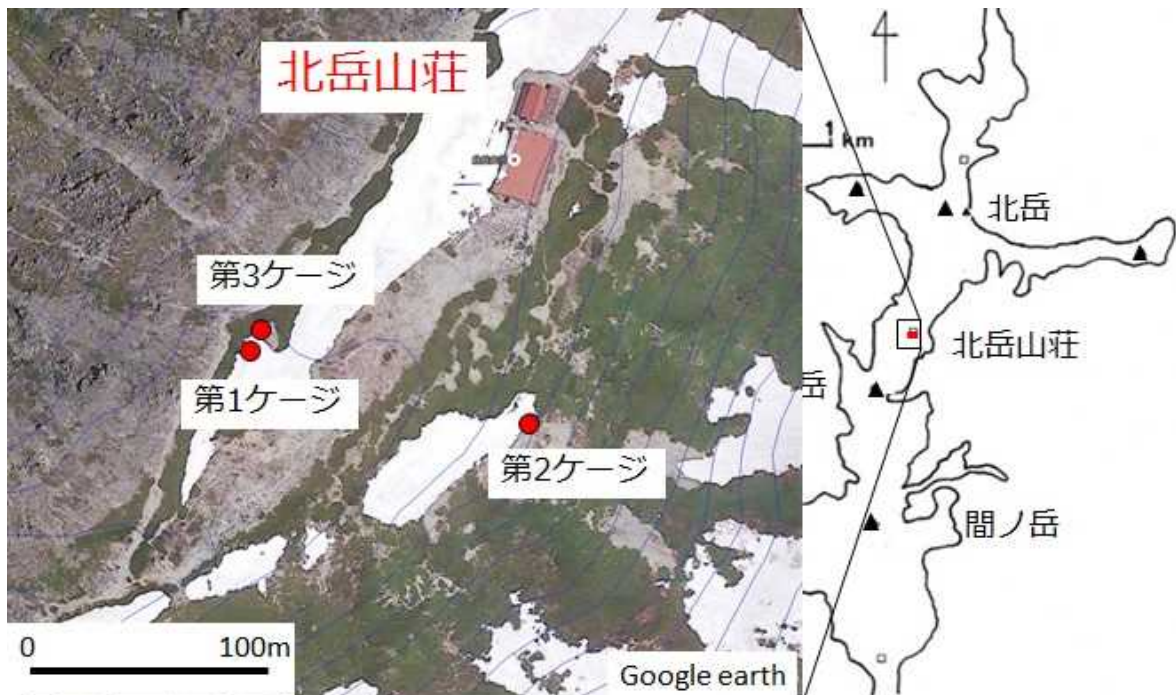


図 1 ケージ位置図

¹ これまで「ケージ内保護法」の名称を使用してきたが、H27 年度検討会より、名称を「ケージ内保護方法」に統一することとした。



写真1 北岳方面からの中白根岳と間ノ岳

(2) ケージの規格

ライチョウの家族を大型固定ケージへ誘導するため、小型移動式ケージを使用した。小型移動式ケージは木製で、幅 90cm、奥行き 67.5cm、高さ 45cm の大きさである(写真2)。大型固定ケージも木製で、サイズは中型(幅 180cm、奥行き 360cm、高さ 120cm) 1 個、および小型(幅 120cm、奥行き 240cm、高さ 90cm) 2 個の 2 種類を用いた(写真2)。ケージは全体を網で覆い、内部はライチョウの保護のためナイロン製のネットを張っている。



写真2 小型移動式ケージ



写真3 大型固定ケージ(中型)

(3) ケージ内保護の状況

平成 28 年度のケージ内保護は、6 月 27 日から開始し、3 家族を人の手で保護した後、7 月 19 日と 20 日に放鳥(24 日間)した。

①平成 28 年度は、6 月の調査で、北岳から中白根岳山頂にかけて計 6 なわばりが確認され。そのうち、3 家族を小型移動式ケージにいったん収容した後、大型固定ケージ（中型及び小型）に誘導した。また、風衝地であり風が強く作業環境としては厳しい条件であった。

②大型固定ケージに誘導した後は、天気の良い日は家族をケージから出し、付近の高山植物を自由に採食させた。ケージ外では原則として 2 人以上が付き添い天敵などに注意し、夕方にはケージ内に誘導した。解放時の見守りの確保等を考慮し、1 家族ずつ交互に外に解放した。ケージに保護してから約 3 週間経過後に放鳥を行った。



写真 4 ケージ外での家族観察



写真 5 ケージから出る家族

③ケージ内では、周辺の高山植物（クロウスゴ、イワツメクサ、オンタデ等）を採取し、プランターに植栽するとともに枝葉を束ねた形で家族に与えた。



写真 6 ケージ内の様子

④北岳山荘周辺に設置したケージに収容した時点での 3 家族の雛数は、計 20 羽であったが、放鳥までに計 5 羽の雛が死亡した。死亡したのは 7～13 日齢で、すべて衰弱による死亡と考えられた。ケージ保護中に雛が死亡した

のは今回が初めての事例であった。また、放鳥前日の夜中にテンがケージを襲い、第2ケージの雌が足の指に怪我をする事態が起きた。

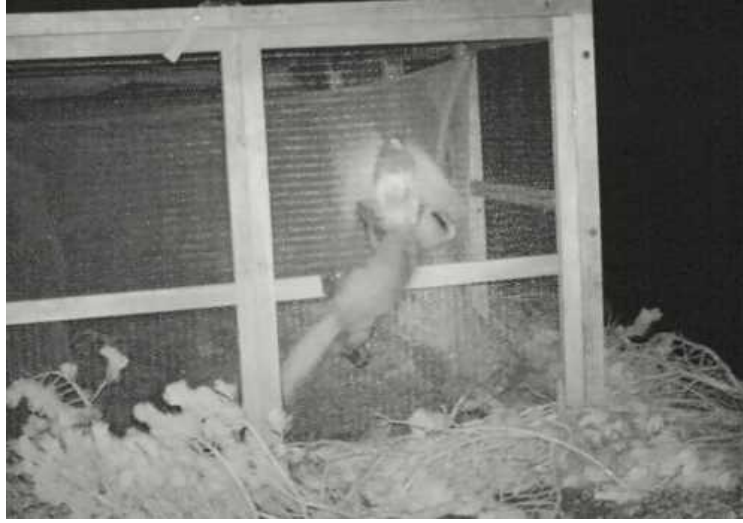


写真7 第2ケージを襲うテン（写真提供：長野朝日放送）

（4）ケージからの放鳥後のモニタリング

放鳥した3家族計15羽のヒナについて、生存状況の確認調査を8月から10月にかけて行った。放鳥時に計15羽であったヒナは、約1ヶ月後の8月16～18日には3羽に、10月には2羽に減少していることがわかった（図2）。ヒナが生存していたのは第1ケージと第3ケージの計10羽のヒナのうち3羽で、第2ケージの雌は8月にはヒナを連れていなかった。放鳥した時点で、ヒナは体温維持がほぼ可能になっているので、死亡の原因は、キツネ、テン等による捕食と考えられた。9月の調査までは3羽のヒナの生存が確認されたものの、10月5、6日の調査ではヒナは2羽に減少していた。ケージで保護しなかった北岳周辺の家族については、7月末にはほとんどの家族がヒナを連れておらず、当地域でヒナがほとんど育っていないことがわかった。

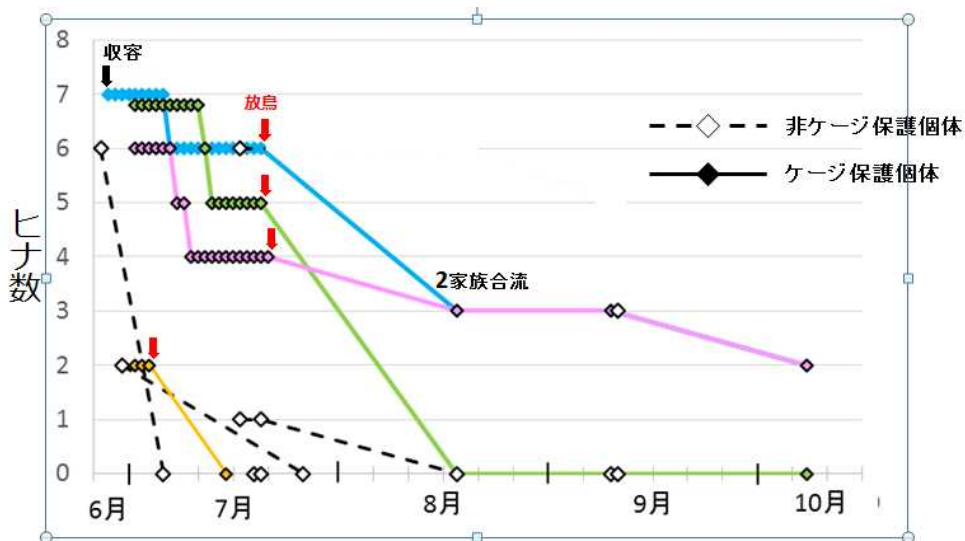


図2 ケージ保護個体および非ケージ保護個体のヒナ数の変化

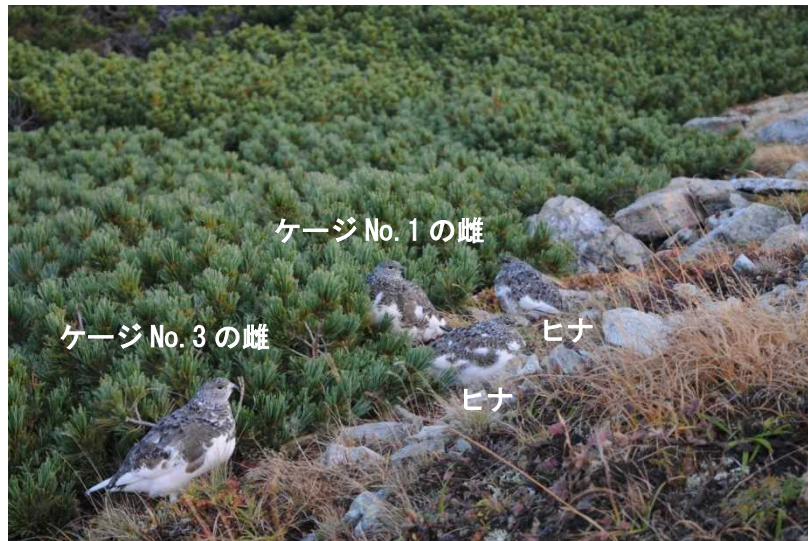


写真8 10月6日に確認されたケージ保護個体（雌2羽とヒナ2羽）

また、自動撮影カメラ6機をケージ近く及び「けもの道」に配置し、放鳥後のライチョウ家族及び天敵などの様子を10月5日まで継続観察した。これまでシカ、サルやテンなどが確認されている。

（5）今後の検討課題

1）捕食者対策の検討

ケージにより死亡率の高い生後約3週間を保護したものの、放鳥後1ヶ月間で15羽いたヒナが3羽となり、放鳥前日にケージがテンに襲われたことも含めて、当地域では捕食によりライチョウの生息が脅かされていることが示唆された。したがって、ケージ内保護方法と並行して試験的な捕食者対策の実施を検討し、減少要因の解明に努めなければならない。

2）ケージでの保護期間の延長の検討

1）に述べたとおり今回の実施により当地域では放鳥後も死亡率が非常に高く、ケージ保護の延長を検討する必要がある。

3）適切な実施体制の確保

期間の延長を考えるうえでは、長期間にわたり山岳環境で作業することが可能な人員による体制確保を行う必要がある。

4）給餌する高山植物量の把握

平成28年度は、給餌のために採取した高山植物の重量を計測し、必要最小限の採取量の把握に努めた。今後、これらのデータを蓄積し整理することによって高山の植生にも配慮した事業を実施していく。



写真9 採取した高山植物の重量の計測の様子